

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号： 16301  
 研究種目： 基盤研究（C）  
 研究期間： 2010 ～ 2012 年  
 課題番号： 22520435  
 研究課題名（和文） 仏典モンゴル語に見られる言語接触を契機とする構造変化の研究  
 研究課題名（英文） Study of linguistic changes caused by language contacts found in Mongolian Buddhist works  
 研究代表者 樋口 康一 （ヒグチ コウイチ）  
 愛媛大学・法文学部・教授  
 研究者番号： 20156574

## 研究成果の概要（和文）：

モンゴル語仏典の行文中に残った証拠から中期モンゴル語時代における言語接触の実相とそれがモンゴル語に惹起した変容を明らかにした。また『法華経』のモンゴル語訳の成立過程に関して、新たな知見が得られたこと、また、トルファン出土仏典写本断片中のモンゴル語訳『法華経』の断片の読みにかかる従来の所説を改め、新たな読みが与えられるべきであることも明らかにできたことも、本研究の特筆すべき実績である。

## 研究成果の概要（英文）：

Details of the language contacts of the Middle Mongolian period and the changes caused by them were described in view of the forms in the lines of Mongolian Buddhist literature. A number of new facts as for editing process of the Mongolian versions of the *Lotus Sutra* were found; especially worth noting is the proposal that the reading of the Turfan fragments of the *Lotus Sutra* produced in the 14<sup>th</sup> century which is supposed to be its oldest version should be corrected.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 言語学・言語学

キーワード： モンゴル語仏典 中期モンゴル語 言語接触 法華経 宝徳藏般若経 宝網経

## 牛首山授記経

### 1. 研究開始当初の背景

モンゴル語の歴史は、古代・中期・近代に三分される。古代語は文献では例証されない祖語であり、近代語は現代の諸方言の謂である。両者の中間段階に当たるのが中期語であり、代表的資料としては漢字音でモンゴル語を写した『元朝秘史』が著名だが、これを含めても資料に乏しく全貌はなお不明である。清朝時代のモンゴル語は近代語であり、モンゴルに西藏仏教が伝来・定着したその時期の製作物が大半である仏典は、総量は膨大でも言語資料的価値は乏しいと見なされてきた。ところが、長く支配的であったその通説は覆され、版本・写本自体の製作年代は後代でも、行文自体はモンゴル人が初めて仏教に親しんだ 13～14 世紀の中期語の面影を色濃く残すものが多いことが明らかとなり、仏典は中期語の実相解明に裨益する格好の言語資料と位置づけられている。研究代表者も、『宝徳蔵般若経』『宝網経』『牛首山授記経』等、従前未研究であった仏典を精査し、資料的位置づけを明確にした上で言語の特色を記述し、中期語の性格解明の一端を担ってきた。そこで明らかになったのが、モンゴル語仏典では外来的要素が頻出することである。元朝時代における多言語状況を背景として見据え、13 世紀にモンゴルに文字を教えたウイグル人が同時に伝えたのが仏教伝播の鎗矢であり、その後別経路で伝わった西藏仏教が元朝では国教として尊崇されたこと、仏典の集大成とも称し得る「大蔵経」の翻訳出版にウイグル人・西藏人・漢人僧侶が大挙参加した旨伝承があること等を考え合わせると、これは怪しむに足りない。研究代表者は上記の仏典以外にも参照しながら、外来的要素の種別化と導入経路の解明を手がけてきた。そこで浮上したのが、これらは主として語彙レベルで

モンゴル語に影響しその語彙構造に変化を及ぼしたことは確かであるが、それ以外の側面にも影響が及んではいないか、という問題である。

以上は、従前交付された科研費補助金等による研究を通じて明らかになったことであるが、問題の所在はさておきその具体的様相については、解明の途に着いたばかりである。本研究は以上の経緯を踏まえ、従前の研究代表者の研究蓄積の発展拡充を期して着想されたものである。モンゴル語仏典は、故地のモンゴル国や中国内蒙古自治区のみならず、ロシアを含む欧米を初めとする世界各地で所蔵されている。ところが、Poppe, Ligeti 等の碩学は既に物故して久しく、門弟の世代も続々と引退した欧米では、かつて盛んであった仏典研究はおろかモンゴル学自体の学問的継承が危ぶまれている。ロシアのモンゴル学も帝政時代以来の伝統に比して低調である感は免れない。仏典の文献学的研究では唯一の存在であった A. Sazykin は不幸にも 4 年前物故した。本来、モンゴル学全体を主導すべきモンゴル国では、経済的困難が仏典研究や文献学・言語学的研究の進展を妨げている。所蔵する資料の質・量ではモンゴル国を凌駕する内蒙古自治区では、現代的手法に基づく文献学・言語学的研究が漸次軌道に乗りつつあるが、仏典研究はその端緒に着いたばかりである。モンゴル語としては特殊な仏典の言語を自在に読解するには、一定の訓練が必要だけでなく、梵語・西藏語・ウイグル語等、周辺諸言語の知識が欠かせないため、研究者の育成には時間を要する—これはわが国にも妥当するが—ことが大きな一因と考えられる。

要するに、その学術的意義は明確に了解されているにも関わらず、モンゴル語仏典の文

献学的・言語学的研究の研究者は少なく、研究代表者を初めとする数名が孤軍奮闘している状況である。

モンゴル語仏典と称しても、大蔵経だけでも全400巻を超えており、蔵外仏典やさらに版本・写本として伝承されている異本類まで含めると、その量は膨大である。その精査は急務であるが、全ての調査とそれに基づく言語の分析記述は短期間では困難であり、それは研究代表者のいわばライフワークと位置づけられる。

本研究の期間内においては、先行する予備調査で比較的アクセスしやすい見通しが得られており、短部の仏典が多く、期間内に一定の成果が出せる公算が大きな大蔵経「大集部」所収の仏典に焦点を当て、その文献学的な位置づけを決定した上で、校訂テキストを確立し、言語特徴の記述を行うとともに、行文内に残る言語接触の痕跡をたどりながら、接触の実相の解明を試みると同時にそれが言語構造に及ぼした変化を記述することを試みる。

その際、研究代表者の練り上げた研究手法と従前の研究蓄積は一定の効果を発揮すると見なし得る。得られた知見を活用し、モンゴル文語の形成過程における外来的要素の影響を、従前の研究成果を援用しつつ、記述したいと考えた。

## 2. 研究の目的

現存するモンゴル語仏典は清朝時代の製作物であるが、その原テキストの成立は400年を遡る元朝時代でありその言語は中期語である。そこにはモンゴル仏教の汎ユーラシヤ的性格と元朝社会の多民族・多言語状況が反映され、ウイグル語・チベット語・漢語等の周辺諸言語との接触の痕跡を豊富に保存されている。接触の結果誕生した仏典モンゴ

ル語は『元朝秘史』等に見られる世俗的言語とは趣を異にした文章語となったが、それが17世紀以降のチベット仏教の弘通とあいまって、現代文語の性格の一半を形成している。本研究は、中期語時代における言語接触の実相を解明し、それがモンゴル語の構造にいかなる変化を及ぼしたかを明らかにすることを目的としたものである。

## 3. 研究の方法

国内外の研究機関・図書館・文書館等に所蔵されているモンゴル語版「般若部」の異本類を博搜し収集した上で校訂テキストを作成し、それに基づき行文の分析と記述を試みた。得られた成果はそれ自身が言語資料として一定の価値を有するので、広く世に問い、その価値を知らしめた。それとともに、従前の研究蓄積を活用しながら、中期語の言語構造に与えた外来的要素の影響を特定し、文章語成立の契機として外来語がいかなる作用を及ぼしたかを解明しようと試みた。

## 4. 研究成果

従前、あまり研究の手が及んでいなかったモンゴル語訳『法華経』の行文を精査に分析する作業を通じて得られた知見、また、研究代表者がかつて手がけた『宝徳蔵般若経』や『宝網経』、『牛首山授記経』等に対する新たな視点からの分析作業を通じて得られた知見等に基づき、そこに残された証拠から中期モンゴル語時代における言語接触の具体的実相とそれがモンゴル語にもたらした変容、さらに、それらがあいまって形成した文章語としてのモンゴル語の構造の特徴等を明らかにした。

そこでは、現代日本語のありようにも通じる異言語との接触とその撰取の過程がつぶさに見てとれるのである。

この作業は、上記の仏典の行文のテキスト批判と表裏一体であるが、その作業を進めることにより、とりわけ『法華経』のモンゴル語訳の成立過程に関して、新たな知見が得られたこと、また、トルファン出土仏典写本断片中のモンゴル語訳『法華経』の断片の読みにかかると従来の所説を改め、新たな読みが与えられるべきであることも明らかにできたことも、本研究の実績として数えることができる。

研究代表者は、さらに『法華経』について精読を進め、校訂テキストの確立を企図するとともに、その他の、未着手の仏典についても、本研究等の遂行で蓄積された手法により分析を進める所存である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- (1) 樋口康一, モンゴル語訳『法華経』管見 (中), 愛媛大学法文学部論集人文学科編, 査読無, 34 巻, 2013, 41-58
- (2) 樋口康一, モンゴル語訳『法華経』管見 (上), 愛媛大学法文学部論集人文学科編, 査読無, 33 巻, 2012, 23-41
- (3) 樋口康一, 文献学的視点から見たモンゴル語における言語接触研究の一様相, 人文学論叢, 査読有, 14 巻, 2012, 17-30
- (4) Koichi, Higuchi, How were the Mongolian versions of *the Lotus Sutra* transmitted? Proceedings of the 55<sup>th</sup> Permanent International Altaistic Conference held at Cluj-Napoka, 査読有, 1, 2012, 22-25
- (5) Koichi, Higuchi, Unknown treasures hidden in lines of Mongolian Buddhist

literature, *Altai Hakpo* (Journal of the Altaic Society of Korea), 22, 査読有, 2012, 139-154

(6) Koichi, Higuchi, Blessing on the top of a mountain; what *Üker-ün ayula* tells us, Proceedings of the 54<sup>th</sup> Permanent International Altaistic Conference held at Bloomington, 査読有, 1, 2012, 22-29

(7) 樋口康一, 仏典翻訳に見られる辞書類利用の実態について, 国際ワークショップ モンゴル語の辞書 予稿集, 査読有, 1, 2011, 89-94

(8) Koichi, Higuchi, Mongolian Translations of *Ratnajāli*: their Significance in View of Philology and Linguistics, Proceedings of the 10<sup>th</sup> International Congress of Mongolists held at Ulaan Baatar, 査読有, 1, 2011, 136-145

(9) 樋口康一, 文献学的視点から見たモンゴル語における言語接触研究の一様相 (上), 人文学論叢, 査読有, 13 巻, 2011, 1-10

(10) Koichi, Higuchi, Two Unreported Manuscripts of the Mongolian *Manjusrinamasangiti*: A Preliminary Report, 愛媛大学法文学部論集人文学科編, 査読無, 28 巻, 2010, 47-66

(11) Koichi, Higuchi, How Mongolian Buddhist Works were translated and revised? Proceedings of the 53<sup>rd</sup> Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference held at St. Petersburg, 査読有, 1, 2010, 64-67

[学会発表] (計 6 件)

① How were the Mongolian versions of the Lotus Sutra transmitted? The 55<sup>th</sup> Permanent International Altaistic Conference held at Cluj-Napoka, 2012 年 7

月 24 日 Babes-Boljai University Rumania

② 仏教文献を通じてうかがい知られる中期  
モンゴル語における言語接触の様相 日本  
モンゴル学会 2011 年度秋季大会 2011 年 11  
月 15 日 大阪大学外国語学部

③ Mongolian Translations of Ratnajāli;  
their Significance in View of Philology and  
Linguistics, The 10<sup>th</sup> International  
Congress of Mongolists held at Ulaan  
Baatar, 2011 年 8 月 14 日 National Mongol  
University Mongolia

④ Blessing on the top of a mountain; what  
Üker-ün ayula tells us, The 54<sup>th</sup>  
Permanent International Altaistic  
Conference held at Bloomington, 2011 年 7  
月 14 日 Indiana University Bloomington  
United States of America

⑤ 仏典翻訳に見られる辞書類利用の実態に  
ついて, 国際ワークショップ モンゴル語の  
辞書, 2011 年 2 月 16 日 東北大学

⑥ How Mongolian Buddhist Works were  
translated and revised? The 53<sup>rd</sup> Annual  
Meeting of the Permanent International  
Altaistic Conference held at St. Petersburg,  
2010 年 7 月 19 日 Russian Academy of  
Science St. Petersburg Branch Russia

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

樋口康一 (HIGUCHI KOICHI)

愛媛大学法文学部・教授

研究者番号 : 20156574